

## 高橋盛孝採録ニヴフ伝統歌謡の詩連と押韻形式

丹菊 逸治

キーワード：ニヴフ 口承文芸 伝統歌謡 韻文 詩

サハリン島北部からアムール河口地域にかけてを伝統的居住地とするニヴフ民族の伝統歌謡は、資料も少ないこともあり、その形式についてはほとんど研究されてこなかった。特に日本領樺太の、いわゆるポロナISK方言地域の伝統歌謡に関する研究は少ない。ポロナISK方言資料としてはニヴフ語を専門的に研究した服部健によるものがあるが、服部健は言語学的な記述を優先したため、伝統歌謡資料はほとんど発表しなかった。本稿で取り上げる高橋盛孝(1942)は同地域の数少ないニヴフ語資料の一つである。高橋盛孝は中国語学が専門であり、ニヴフ語は1928年に1度調査をしただけだが、無理に音韻解釈せず音声表記を優先しており、かなり正確な表記となっている。高橋盛孝(1942)には7編のニヴフ伝統歌謡が含まれているが、本稿ではその歌詞の詩連・押韻形式の分析を試みる。丹菊逸治(2018)ではアイヌ民族の伝統詩(叙景詩)・叙事詩の詩連・押韻形式について分析し、ニヴフ伝統歌謡についても叙事詩の詩連・押韻構造を簡単に示した。本稿はいわばその補完であり、より短いニヴフ伝統歌謡の押韻形式の確認の試みである。

高橋盛孝(1942)の歌謡の歌詞表記には口語体のニヴフ語と異なる語彙や文体が見られるが、それらのいくつかには高橋盛孝自身が注釈を付けている。また音声表記であるため、歌った際に母音に変化していたり、子音間に挿入母音が入れられていたり、あるいは子音の音が変わっている場合は、その変化が表記に反映されている。必ずしも行単位で対応してはいないが、日本語訳も付されている。

以下では高橋盛孝(1942)の7編のニヴフ伝統歌謡(①～⑦)について、原表記と原訳を示し、次に丹菊による音韻表記・試訳・註釈をつけた。原訳内にあらわれる( )は原文のままである。丹菊による音韻表記では、押韻部は太字で示し、本来あるべきなのに歌った際に脱落したと思われる音は[ ]内に補い、挿入された母音は( )でくくった。音に変化しているものには\*、\*\*などを付して註釈を付けた。また、意味が分からない語彙などについても同じく\*、\*\*などで註釈とした。それらの後に詩連の構造・押韻形式を解説した。

なお、高橋盛孝(1942)では各歌冒頭にタイトルは付さず、(1)～(7)の番号を付している。ここでもそのまま示した。

① 高橋盛孝 (1942) p117-118 第1歌 (Amta 作)

(1) takkř wonuŋ pɣngangoŋga:	向ふの村人なる若者が、
tʃɣyv gusil-itř jos'ko:ra	熊を引き出さうとして河を渡り
tʃɣyv-ŋgaɣ tmŋgo n'idz'en'uira	熊の檻の上から自分の方を見てゐる。
ofte-dz'if tol'ko dz'e:n'uira	便所への道に沿うて真直ぐ見た。
tʃaɣ-pen-dz'if tol'ko dz'e:n'uira	水汲む道に沿うて見た。
uskan-kař tuziva engfi:ra	入口の柱にぶつかり曲り、
hukŋ-ox tʃ'χu-inva tʃ'if tʃ'urnge:.	伏せた槽 (かひばをけ) につまづきドタン バタン。
-Amta-	Amta 誦

音韻表記および丹菊による試訳

1 taqr <sup>h</sup> von(u)ŋ p <sup>h</sup> ŋaɣŋ(a)	対岸の村の若者よ
2 tʃɣəv gus(i)r itr <sup>h</sup> josqora	熊を引き出すと言って川を渡り
3 tʃɣəv ŋaɣ t <sup>h</sup> məŋə ɲr <sup>h</sup> əŋə(i)ra	熊の檻を向いて見ており
4 oftə dzif tulku [ɲ]r <sup>h</sup> əŋə(i)ra	トイレへ続く道を通って見ており
5 tʃaɣ p <sup>h</sup> en dzif tulku [ɲ]r <sup>h</sup> əŋə(i)ra	水汲みに行く道を通って見ており
6 usqŋkar <sup>h</sup> tuziva eŋfira	物置部屋の柱に当たって振り向き
7 hukŋ ox tʃχujva tʃiftʃurnge.	逆さに置いた木鉢につまづきどたばたした。

全体の構成

7行からなる詩。子音韻による頭韻と、同一形態素 **ra** (動詞連体形語尾) による脚韻が目立つ。

押韻

第1・2・3・5行が **t** および **tʃ** による頭韻、うち第2・3行は同一語 **tʃɣəv** による。

第6・7行が母音 **u** による頭韻。

第7行を除く第1~6行全てで母音 **a** による脚韻、うち第2・3・4・5・6行が同一形態素 **ra** による脚韻、さらにそのうち第3・4・5行が **[ɲ]r<sup>h</sup>əŋə(i)ra** の繰り返しによる脚韻、さらにそのうち第4・5行は **dzif tulku [ɲ]r<sup>h</sup>əŋə(i)ra** まで一致。

第7行後半部は子音 **tʃ** が語頭で3回の繰り返し (子音韻)。

② 高橋盛孝 (1942) p118-119 第2歌 (Amta 作)

(2) huija-amɣ̃ ti:vŋkta intŋa	保恵河口を下つて来るのを見て
tleolan keaxtoɣ jaharanga:	白い鷗だと思つたら
pa:řřa-pa:řřa-hankt intŋa:	手を上げ下げするのを見た。
o kon'i Gofkof-to	ああ あのゴフコフ老人だった。
-Amta-	Amta 誦

音韻表記および丹菊による試訳

1 Hoj i amɣ̃ tivŋkta intŋa	保恵川河口で船に乗り、見ると
2 tleolan keaxtoɣ jexorŋa	白い鷗と思つたものが
3 par <sup>h</sup> ra-par <sup>h</sup> ra* hankt intŋa	ひらひらするのを見たのだが
4 o kuŋ** Gofkofto	おや、あのゴフコフ氏だ

\* 自動詞 par-par-「(稲妻などが) 明滅する」の連用形。遠くでゴフコフ氏が手を振り回すさまが明滅するように見えたのであろう。

\*\* kuŋ の母音は実際には u ではなく o で発音されていたと思われる。

### 全体の構成

全体は 4 行で構成されている。頭韻からみると A--A、脚韻からみると AAAB である。母音の配列全体からみると、母音 a を中心とした第 1・3 行と母音 o を中心とした第 2・4 行、つまり ABAB 形式でもある。

### 押韻

第 1・3 行末が同じ語 intŋa、第 1・2・3 行末が同じ形態素 ŋa で脚韻を踏む。

第 1・4 行が母音 o で頭韻。第 2 行の eo も韻に参加している可能性がある。

各行内では以下のように母音が繰り返しになっている。

o-ia-ia-ia

eo-eo-eo-a

aa-aa-a-(i)-a

o-u-o-o-o

③ 高橋盛孝 (1942) p119 第3歌 (Amta 作)

(3) tornkikn mu:mukhys	五人漕ぎの舟で 逃げる
pingijakanan	泡立てる瀬を 逃げる
povriř hefken	北風よ 帰るよ。(以下欠)
pinginungura:	Amta 誦
lams'i-tejanga:	
pfjanggalora:	
-Amta-	

音韻表記および丹菊による試訳

1 t <sup>h</sup> orŋ kikŋ mu muxəs	5つの櫂の船、(その) 船で
2 p <sup>h</sup> iŋ jaka nan	逃げるのだ、今
3 povriř <sup>h*</sup> hefken**	泡立つ浅瀬(?)を
4 p <sup>h</sup> iŋinəçura	逃げようとするのだ
5 lams teŋŋa	北風が吹いたら
6 p <sup>h</sup> fingura	逃げるのだ

\* Савельева и Таксами(1970)p289 p<sup>h</sup>ova 「すばやく」。

\*\* 不詳だが、動詞\*he-からの派生とすれば hefkŋ というような語形も考えられる。

### 全体の構成

6行からなる詩。最後の3行末に長音記号が付されているので、1行を3行に分ち書きしたのではなく、実際に3行が長く歌われたのであろう。頭韻からみると ABABCB、脚韻からみると ABBCCC である。

### 押韻

第2・3・4・6行が子音 p, p<sup>h</sup>で頭韻、うち第1・3行は母音 o、第2・4・6行は母音 i も一致。

第2・3行が子音 n で脚韻。

第4・5・6行が母音 a で脚韻、そのうち第4・6行の押韻は同一形態素 ra による。

④ 高橋盛孝 (1942) p120-121 第4歌 (Tjakkin 作)

(4) arak-tunt	酒歌
kuvŋ-kik fi:ta	一番綺麗な靴を はいて
was'n kiřn fi:ta	美しい あざらし皮の はぎあてをはいて
pilaŋ-tu guita	大きな 櫓を引張り
tʃχ̣ař-ŋař vi:fo	薪とりに 行きつつ
a:vŋ fanka	えらいものの 女が
a:n'a-ŋaχ taftyχ	牝犬の小屋の前で
ply:χ-plygyř	転がって 泣いた。
tʃe:ri:ont	女の所へ 帰らうと思つたが、
eraχ pχyin-aχař	薪はなし、
tʃχ̣ař kavřta	いや 薪をとる方が よい。
ais' tʃχ̣ař ŋgant-es'kn	火を 消すのは悪い。
u:rjakna	Tjakkin 誦
ju:gurfurro janiro	
tug'ur tornt-es'kn	
akkindra. -Tjakkin-	

音韻表記および丹菊による試訳

		alχtud*	抒情歌
1.	A	kuvŋ kik fi:ta	美しい (?) 靴をはき
2.	A	waʃŋ kiřŋ fi:ta	アザラシ皮のはぎあて (?) をはき
3.	B	pilaŋ t <sup>h</sup> u gujta	大きな櫓をひき
4.	C	tʃχař <sup>h</sup> ŋař <sup>h</sup> vivo	木 (薪) を切りに行こうとすると
1.	A	avŋ r <sup>h</sup> aŋq(a)	アヴン氏族の女性が
2.	A	aŋ(a)[χ]ŋaχ taftəχ	雌犬の小屋で
3.	B	pləχpləy <sup>h</sup>	転がって (?)
4.	C	t <sup>h</sup> eriont	泣いた
5.	B	erχ pχəjŋay <sup>h</sup>	そこへ戻ろうとしたが
6.	C	tʃχař <sup>h</sup> kav <sup>h</sup> ta	薪がない

1.	A	ajr <sup>h</sup> tʃχar <sup>h</sup> ŋant er <sup>h</sup> qŋ	薪を切るのが
2.	B	urlakna	良いよなあ
3.	C	jug(u)rfullo janlo	一緒にいてやろうか、やめようか
4.	A	t <sup>h</sup> uɣr tornt er <sup>h</sup> qŋ	火を弱めるのは
5.	B	akkindra	悪いよなあ

\* 原文では arak-tunt 「酒・歌」と解釈しているが、これは alɣtud と呼ばれる抒情歌である。Крейнович (1973) では語源的には動詞「開く」と関連があると考えている。

### 全体の構成

押韻は一見無秩序に並んでいるが、ɣr<sup>h</sup>、r<sup>h</sup>qŋ、nt などの複数の子音連続による韻は強い印象を持ち、その行は同じ歌い方（音の高低パターン）だった可能性が高い。またニヴフ伝統歌謡は頭韻部よりも脚韻部を伸ばして歌う傾向が強い。それらを考えると以下のような詩連構成が考えられる。

第1連 (AABC) : 4行

第2連 (AABC+BC) : 6行

第3連 (ABC+AB) : 5行

### 押韻

#### 1. 連と連の間で対応する行における押韻

第1連と第2連の間で、各連第3・4行頭が p, t<sup>h</sup> に揃えられている。つまり第1・2連が第3行で p による頭韻、第1・2・3連がいずれも第4行で t<sup>h</sup>, tʃ, t<sup>h</sup> による頭韻を踏んでいる。第1・2連が第4行で母音 o による脚韻、おそらくこれに第3連第3行末の母音 o も参加している。

#### 2. 連内部の押韻

##### 第1連

第2・4行が母音 a による頭韻。

第1・2・3行が母音 a による脚韻、うち第1・2行は同一語 fita による。

第1・2行の第2語がともに子音 k で頭韻。

第2連

第1・2・6行が母音 a による頭韻（ただし第6行はむしろ行内の繰り返し）。

第4・5行が母音 e による頭韻。

第3・5行が子音 yr<sup>h</sup>による脚韻。

第1・5・6行が母音 a による脚韻。

第2・3行が母音 ə による脚韻。

第2行内で子音 x, x による子音韻（同一子音の繰り返し）。

第3連

第1・5行が母音 a による頭韻。

第2・3・4行が母音 u による頭韻。

第1・4行が同一語 er<sup>h</sup>qŋ による脚韻。

第2・5行が母音 a による脚韻。

⑤ 高橋盛孝（1942） p122-123 第5歌（Tjakkin 作）

(5) arak-tunt'	酒歌
n'i kaftʃ'it-karagara	私は頭髪が白くても
hainappu	家の前へ行き 女を見ると
tafti vin ʃaŋk intŋa	女は美しい。好きだ。
ʃaŋq urɣara:	水汲みに 行つた。
jagan'itnugra	そのあとから 行つた。
tʃaŋgas vinkt	そのバケツを 掬んだ。
jaři vit	引つぱると
imrk ernt	肘鉄砲を喰わした。
iɣ'ylŋa	それでも草が深くなればよいが。
pedz'was'kn	許してくれ。
hainappu	Tjakkin 誦
tʃ'igʃ jeoga	
urntřa	
noʋarija	

-Tjakkin-

音韻表記および丹菊による試訳

alxtud	抒情歌
1 ni kaft'it kara-γara	私は頭が真っ白
2 haj napə	だけれども
3 taftə vin ʃaŋq intrə	庭に行って女性を見ると
4 ʃaŋq urχ(a)ra	女性は美しい
5 jəʌnit nuγra*	欲しいと思った
6 tʃa[χ] ŋaʃ vinkt	水を君に行って
7 jari vit	彼女を追いかけて
1 imrək evnt**	彼女の水汲み容器をつかみ
2 iχl[ə]ŋa	引っ張ると
3 pedzwaʃkŋ***	肘鉄砲を
4 haj napə	食わされたが
5 tʃiγr <sup>h</sup> jeoga****	草が目覚めれば
6 urntra	いいのだけれど
7 ɲovarija	私を哀れんでくれ

\* 原文は nud となっているが、他動詞 nəd 「する」か。

\*\* 原文は ernt となっているが evnt の誤りか

\*\*\* 原註で「肘鉄砲を打つ」とあるが不詳。

\*\*\*\* 不詳。jeχo-ŋa 「目覚めれば」か。あるいはひよっとすると eŋŋ(a) 「(生育が) 早い」か。

### 全体の構成

詩連はおそらく 7 行ずつの 2 連に分かれる。母音 a による頭韻を中心とする前半、母音 i による頭韻を中心とする後半である。第 1 行は子音 k が繰り返し現れる「子音韻」になっている。第 2 行以下は 2 行ずつ組になっているようにもみえる。

### 押韻

第 1・2 連の第 1 行がともに母音 i で（連と連の間にまたがる）頭韻。

第 1 連 6・7 行と第 2 連第 8 行が子音 t で（連と連の間にまたがる）脚韻。



第1連

第2～7行が母音 a で頭韻。

第2・3行が母音 ə で脚韻。

第1・4・5行が母音 a で脚韻。

第2連

第1・2・5行が母音 i で頭韻。

第2・3・5・6・7行が母音 a で脚韻。

脚韻に用いられる形態素は特に第2連において -ra, -ŋa, ja など比較的ばらばらである。

⑥ 高橋盛孝 (1942) p123-124 第6歌

(6) ytyk nonka	父の子
tʃ'iu tʃ'iu k'okkaja:	ねんねんころり よくねむれ!
pilika n'iy'vŋ muřa	大きな人になれ
ngafuř n'inařža	獣とつて我に食はせ
tʃoxys' n'inařža	魚を我に食はせ
mun-kavriř pantř	死なないで大きくなれ
urra n'iy'vŋ muř	よい人になれ
pantřaja	大きくなれ (東北方言のをがれ)
komk dz'in kon kavř	腹も痛めぬやう。
-Jukkan-	Jukkan 誦

音韻表記・丹菊試訳 (Jukkan 作)

ətək nonqa	父の子よ
1 t'iw-t'iw qo-qa* ja	音、音、眠れ
2 pilka[r] niyvŋ mura	大きな人になって
3 ŋafuř nin ar'ja	獣を獲って私たちが養ってくれ
4 tʃoxəf nin ar'ja	魚を獲って私たちが養ってくれ

1	mun kavrir <sup>h</sup> pantr <sup>h</sup>	死なずに育ち
2	urla niɣvŋ mur <sup>h</sup>	立派な大人になって
3	pantr <sup>h</sup> ajja	育っていけ
4	qomq dʒin qon kavri <sup>h</sup>	腹など病気にならずに

\* 動詞 qo-「眠る」から畳語形 qo-qo-が作られ、次に命令系助詞 ja が後置されたため、後半部の o が逆行同化で a になっている。どちらも日常会話では起きない変化である。

### 全体の構成

高橋盛孝の説明ではこれは子守歌だという。他の歌と基本的に同じような構造と詩形式になっている。最初の 1 行はタイトルとして付されたものと思われる。歌自体は 2 つの 4 行連から構成されている。

### 押韻

第 1・2 連ともに、第 1・2 行の頭韻がそろい、また第 3 行は頭母音が a で第 4 行は頭母音が o という配列になっている。

#### 第 1 連

第 1・2 行が母音 i による頭韻。

全 4 行が母音 a による脚韻。冒頭の行も参加。

#### 第 2 連

第 1・2 行が母音 u による頭韻。

第 1・2・4 行が子音 r<sup>h</sup>による脚韻。

第 1・3・4 行が母音 a による脚韻。

最終行は行内で子音 q が繰り返される「子音韻」になっている。

⑦ 高橋盛孝 (1942) p124-125 第7歌 (石太郎 作)

(7) ju:toira ju:toira	見ろ 見ろ (この語は古語らしく意味も疑はしい)
so:rol wa:roř ju:tuiru	溶かして、かんなでけづり 見ろ
Konggan řin Ngaifln řin	Kongan (人名) と Ngaifln との
solõon třif huntnan mařtyř	歩いた道、あれなら本当に
untai pažeř-pa:žeř	大きなツンドラ原をだんだん歩いて行つた。
dž'itř'ibt solõont	踏んで歩いた。
a:vŋ solõontat solõont-lo	立派な人たちは 歩いた 歩いた。

-石太郎-

石太郎誦

音韻表記および丹菊による試訳

1	<b>jutojra* jutojra</b>	ユートイラー、ユートイラー
2	<b>sorol** wa[ɤ]ror<sup>h</sup> jutuiru</b>	溶かして (?) イナウを削り、ユートイラー
3	<b>Konggan řin řajfln řin</b>	コンガン氏もンガイフリン氏も
4	<b>solõon*** třif hunt nan mařtər<sup>h</sup></b>	歩いた道、これが本当に
5	<b>[h]un taj pazr<sup>h</sup>-pazr<sup>h</sup>****</b>	この平原を歩いて歩いて
6	<b>džitř'ibt solõont</b>	踏みつけて歩いた。
7	<b>avŋ solõont at solõont lo</b>	アヴン氏族は歩きに歩いたのだな

\* 原訳「見ろ」とあるが不詳。一種の繰り返し (リフレイン) のように用いられているか。

\*\* 原訳「溶かして」とあるが不詳。

\*\*\* 原訳「歩いた」とあるが不詳。

\*\*\*\* 原訳「だんだん歩いて行つた」とあるが不詳。他動詞 paz-「投げる」とは意味が合わない。

全体の詩連の構成がよくわからない。第5・6行が短い、わざわざ原文で pa:žeř のように長母音記号を用いているので、この行分けでよいと思われる。

第1・5行が母音 u で頭韻。

第2・3・4行が母音 o で頭韻、うち第2・4行は頭子音 s も一致。

第1・2行が同一語 jutojra で脚韻。

第4・5行が子音 r<sup>h</sup>で脚韻。

## まとめ

以上 7 作品にみられる詩連と押韻の形式は以下のようになろう。

1. 4 行 1 連構造を持つものと、持たないものがある。
2. 頭韻と脚韻がある。どちらも子音韻および母音韻によるが、母音韻のほうが多い。
3. 脚韻は同一語、同一形態素によるものもあるが、それらによらない韻もみられる。
4. 行内での韻がある。子音韻および母音韻による。
5. 連と連の間で、対応する行での押韻がある。

なお、ポロナISK 地域のニヴフ民族はアイヌ民族とも接触していた。簡単ながらアイヌ民族の伝統歌謡との比較をしておきたい。

① (上記 1.) アイヌ民族の叙事詩では 4 行 1 連構造が明確であり、短い歌謡でもしばしばみられる。大きくみれば、この詩連構造はニヴフとアイヌで共通する。アイヌの「ウポポ」には 4 行 1 連構造が顕著だが、必ずしも歌唱形式（輪唱、リード+コーラス）に関係するとは限らない。ニヴフと共通していることからみると、むしろ大陸との関係を考えるべきであろう

② (上記 2. 3. 4.) 押韻形式もよく似ているが、ニヴフ伝統歌謡の脚韻では同一の形態素（動詞連用形語尾-ra、接続助詞 Ꞥ など）によることが多い。このような偏りはアイヌにはみられない。

③ (上記 5.) 連と連の間で、対応する行での押韻はアイヌ伝統歌謡にはあまりない。アイヌのウポポは単一の詩連のみで構成されるから当然だが、挨拶の歌や叙事詩においてもあまりみられない。

## 引用文献

Крейнович, Ерухим Абрамович, 1973 *Нивхгу, Загадочные обитатели Сахалина и Амура*, Издательство "Наука", Главная редакция восточной литературы, Москва, (日本語訳: クレイノヴィチ, E. A. 『サハリン・アムール民族誌 ニヴフ族の生活と世界観』 柘本哲訳 法政大学出版局 1993)

Савельева, Валентина Николаевна и Таксами, Чунер Михайлович, 1970, *Нивхско-Русский Словарь* Издательство "СоветскаяЭнциклопедия"

高橋盛孝 1942 『樺太ギリヤク語』 大阪朝日新聞社

丹菊逸治 2018 『アイヌ叙事詩鑑賞 押韻法を中心に』 北海道大学アイヌ・先住民研究センター言語アーカイヴプロジェクト報告書

(たんぎく いつじ・北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

## Verse of Nivkh Traditional Songs Recorded by Moritaka Takahashi

TANGIKU Itsuji

Takahashi(1942) includes 7 Poronajsk dialect Nivkh traditional song texts which were recorded in the fieldwork in Sakhalin in 1928. Based on those 7 songs, Nivkh verse form has alliterations and rhymes both by assonance and consonance. Some of them have 4 line stanza structure. This form is basically common to Ainu verse. Some Nivkh songs have alliterations and rhymes between the first stanza and the second stanza. This type is not seen in Ainu songs.